

# PAプログラムの3つのサイクル

プロジェクトアドベンチャージャパン 林 壽夫

PAプログラムは3つのサイクルが同時に回っている。

PAプログラムの活動の中では体験学習サイクル(D.Korb)が活かされているということは、よく知られています。

PAJでは、玉川大学と共同で2006年にQU調査を実施しました。またその調査を踏まえて、それぞれのクラスの担任の先生への追跡調査の結果、いくつかの傾向が読めてきました。(詳細はPAJホームページ参照)

中でも最も重要なポイントであったのが、

**「ビーイング」など「フルバリュー」を実践する手法と、それを活かすための「コミュニケーション活動」の重要性**でした。

次の図はこの傾向を説明するために、PAプログラムのメカニズムを従来とは別の観点から説明しようとしたものです。

PAプログラムは3つのサイクルが同時に回っていると考えられます。

## 1. アドベンチャーのサイクル

まずはアドベンチャーのサイクルです。本来、人はお互いが協力し合って生きてきた動物です。それが生きるための本能であったと考えられます。自然の中では身を守るため、獲物をとるため、人はさまざまな場面でお互いに協力する必要があったのです。ところが現代にあって人は文明の利器に守られ安全に暮らせるようになってきました。つまり日常的に人と協力する必要が無くなってきています。この結果、「人と協力する」という本能の歯車が錆び付いて良く回らなくなっているようです。「人と協力する」のは信頼関係作りの基本です。

では、どうすれば本能は動き出すのでしょうか。そのための最も有効な方法の一つがアドベンチャーです。人は切羽詰ると本能が動き出します。なんとかこの状況を切り抜けなければならぬと考えるから、今まで眠っていた本能が動き出すのです。アドベンチャー活動の最大の特徴がこれです。

アドベンチャー活動により本能が揺さぶられ、「人と協力する」歯車に油が少し注がれます。そして、「お互いの協力」が始まるとそこに「信頼関係」が育まれます。信頼関係ができてくると、いままで怖いと思っていたアドベンチャーにもっと挑戦しようと思うようになります。つまりアドベンチャー活動によって作られた信頼関係が次のアドベンチャーへと繋がっていくのです。こうしてアドベンチャーのサイクルは回りながら信頼関係をどんどん深いものにしていきます。

PAコースが無くて実際のアドベンチャーができないときは、ゲームなどを使ってこれに替わる

ものを工夫していくことが可能です。

## 2. 「ビーイング」のサイクル

「フルバリュー」はPAプログラムで最も大切な考え方です。お互いを最大限に尊重しようという約束です。これを具体的に展開する手法として「ビーイング」というものは実にうまくできている手法です。自分の存在を認めてもらうかわりに相手の存在も認めるという考え方は積極的に捉えれば相手の存在を尊重する戦争を回避するための理屈でお互いが存在する(Being)ことを認め合うというところから人類の存在は始まる、という根源的な考え方に立つ手法です。ところが時々「ビーイング」は使いにくい、という話を聞くことがあります。やり方を工夫すればきっと楽しくできると思います。狙いとするところは信頼関係作りです。

お互いが安心していられるグループを作るために自分はこんなことができる、あるいはこんなことをされると安心してられない、ということを書き出すことから始まります。(「ビーイング」の詳細についてはPAJホームページ「Being(ビーイング)誰が書いたかわからない版」を参照)。

大事なポイントは「ビーイング」は作っただけではダメだということです。「ビーイング」を作ったあとこれを活用することが重要なのです。これはQUの追跡調査から傾向として見えてきたことです。これは「ビーイング」のサイクルを見ていただければ理解しやすいと思います。

つまり「ビーイング」を作ったままにするのではなく、作ったあとのコミュニケーション活動などでこれを活かすことが大事だということです。

人間関係は人間関係の中でしか学ぶことはできません。コミュニケーション活動の後「ビーイング」を使って「振りかえり」をします。ここが大切なポイントです。コミュニケーション活動は一般の教科教育では「グループ学習」として今までも行われてきます。こうした活動の中では「思いやり」や「優しさ」また、自分本位なわがままな行動も出てきたりします。

グループ学習の授業が終わった後、ほんの数分で良いので、今の授業の中で「ビーイング」に書かれたことが実行できたかをみんなで話し合ってもらいます。そのひと時が大切です。実際に話が出てこなくても良いのです。実行できたかどうかを振り返っているときに子どもたちの頭の中には少しずつ「ビーイング」が染み込んでいきます。その中で発見された課題は「ビーイング」に書き加えられ、更に「ビーイング」は深いものになっていきます。この過程で信頼関係がしっかりしたものに発展していくこととなります。

## 3. Emotional Adventure(こころの冒険)のサイクル

アドベンチャーのサイクルと「ビーイング」のサイクルにより作られた信頼関係をベースとして、Emotional Adventure のサイクルが回っていきます。「体験」を振りかえり、そこで気づいたことをもとに自分の考え方を変えていくことが、成長のためには最も大切なことです。それが「Emotional Adventure」です。人は今まで持ち続けてきた自分の考え方を変えることは、たいへんなアドベンチャーなのです。変えないほうが安心です。でも、そのままの狭い考え方では対立を回避することはできません。よくある「こうでなければならない。」という考え方がそのひとつ

の表れです。論理療法ではカウンセリングによりそれを「こうであったほうが良い」というレベルに変えていきます。PAプログラムではこの変化を信頼関係の中で自然に起こる「気づき」に求めます。自分で気づき、仲間の支えで自分を変えるアドベンチャーに挑むということです。

これは別な言い方をすると、一つの考え方を捨てるということです。ただ、考え方を捨てるには、自分の中に相当すごい葛藤があるはず。そこまでして捨てた考え方は、決して無くなるわけではありません。それは自分の中のどこかに保存されています。人の器はこうして作られていくのではないのでしょうか。いままでの考え方を捨て、多くの葛藤を経験すればするほど、それだけ考え方の幅が広がったことになります。こうして作られた大きな心を持った人は、気持ちに余裕が生まれてきます。今まで大問題だった対立がたいした問題ではなくなってきます。

平和というものは「おおきなこころ」によって作られるものだと考えます。そのおおきなこころは、一人一人の葛藤の積み重ねによって作られていくのではないのでしょうか。それを支えていくのが仲間との信頼関係なのです。

2008.1.28